

源氏物語 須磨・松風図屏風

学習院大学史料館蔵
六曲一双
江戸時代(17世紀末～18世紀前半)
(各)横 276.8cm 高 123.0cm



左隻



右隻



挿図1



挿図2

『源氏物語』の須磨帖と松風帖からそれぞれ一場面を選んだ、いわゆる源氏絵屏風である。胡粉を文様の形に盛り上げ、その上に金箔を貼付した装飾金雲を大きく棚引かせ、右隻には光源氏の須磨での侘び住まいの様子、左隻には大堰の山荘に住む明石の君一家の様子を近接的に描く。左右隻とも屋台(建造物)を大きく展開し、あたかも視線を導く矢印のような働きを担わせ、海景が左右隻の空間を連続させる。須磨の源氏が都を思い眺める視線の先に、それよりもずっと物語の時間軸を進めた時空の、明石の君が琴を奏でつつ源氏との将来を思い侘びているのである。この屏風の趣向は、『源氏物語』の全体像を思い浮かべつ、左右隻の画面を有機的に関連付け楽しむところにある。

制作期は、人物の面貌に見られる気品や装飾金雲のおとなしき、装束の文様描写など17世紀末から18世紀前半と考えるのが妥当であろう(挿図1, 2, 3)。

人物の面貌や樹木表現などに見られる描写の特性は、やまと絵とも狩野派とも判別しがたい両側面を持っている。おそらくこの画家は画技のトレーニングを狩野派で始めたと思われるが、さりとて狩野派正系の画家グループに入るほどには狩野派的様式特性を身に着けなかったのではないだろうか。

本作の特質は、左右隻で〈源氏と明石の君の物語〉を作り出すところにあり、そこに近世における源氏読みの在り方を窺うことが出来る。だが、問題となるのは、右隻の季節が曖昧であることだ。近世の源氏絵における須磨帖からの場面選択は、ほとんどが次の二つのいずれかである。一つは秋、海に見える廊に出て都を思い眺めや

る源氏を描くもの(たとえば福岡市美術館の土佐光起筆「源氏物語図屏風」)、もう一つは春の若木の桜が咲く庭を見て感慨にふける源氏を描くものである(たとえばサウスオーストラリア美術館の須磨明石滞標図屏風)。左隻が紅葉した楓を配していることを勘案するならば、春秋を取りそろえた一双屏風ということで、右隻は春の景が本来相応しい。だが、右隻に桜は見当たらず、といって秋の紅葉や秋草もなく、季節の標識が不明確で曖昧である。おそらくこの画家は、須磨の情景は秋の景であることが先入観として染みついており、春の桜を描くことにためらいがあったのではないだろうか。

『源氏物語』に材をとった謡曲は十曲を数え、近世における『源氏物語』享受、とりわけ造形化に大きな影響を与えた。サウスオーストラリア美術館本は、謡曲「須磨源氏」と「住吉詣」を〈世界〉とするものである。本作もまた、このような源氏読みを基層に、源氏と明石の君物語+春秋の趣向という構想で作られた一双屏風を手本としつつも、自己の不十分な知識や判断によって、本文との距離が出てしまった作例といえるだろう。だが、描写の細部を観察すると、緑青や群青といった顔料(岩絵の具)は輝きを持っており、装束の文様描写や人物の面貌、樹木や波の線など、線描も強くしなやかである(挿図4)。丁寧な描写、上質な顔料、しかし金はやや純度が低いといった特徴は、本作の注文主の階層をある程度推測させる。123.0cmという中屏風の仕立てからも、注文主は仰々しい身分であるというよりも市井の富者であり、婚礼調度として作らせたものであるかもしれない。

(文学部教授・史料館研究員 佐野みどり)



挿図3



挿図4

